

シリーズ②

都市における鳥類による被害とその解決策

一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所

信州大学 名誉教授 中村 浩志

人と野鳥の関係は、これまで長い間続いてきた人が野鳥を食べる関係から、人が野鳥を守る関係へと変化したことで、近年多くの野鳥が都市に進出するようになった。その結果、野鳥と都市住民との間で様々なトラブルが起きている。現在、最も深刻な課題は、都市の繁華街に大群でねぐらをとるようになったムクドリの問題である。なぜ、ムクドリが最近繁華街にねぐらをとるようになったのかの理由を明らかにした上で、この問題の唯一の解決策は、群れが都市に集まり始めた初期段階で住民が協力し徹底的に追い払うことで、都市にねぐらをとることを諦めさせ、以前のように郊外にねぐらをとる習性に戻すことであることを示した。また、野生動物とは一定の緊張関係を持ち、互いに棲み分けることの重要性に言及した。

1 市街地に集まりねぐらをとるムクドリの大群

梅雨が開ける7月下旬以降になると、毎年テレビや新聞に市街地の駅前などに夕暮れとともに集まって来るムクドリの大群（写真1）がニュースで報道されるようになる。集まって来るのは、ちょうど仕事を終えて帰宅する時間である。数千羽のムクドリが空を黒くして市街地の上空を旋回する様は、異様で、その場に遭遇した人に不気味ささえ感じさせる。

旋回は、車のライトが点灯し始めるころまで続く。そのころになると電柱やビルの屋上、樹上などに大群でとまっては飛び立つことを繰り返した後、やがてそれらの1か所に落ちて着いて、そこをねぐらとして一晩を過ごす。翌朝には、夜明けとともに大群はどこともなく飛び去ってゆく。昼間は見かけなく、夕方になると集まってきてねぐらをとることを繰り返す。

現在では、日本のほとんどの都市でこのムクドリの大群がねぐらをとっていて、大きな社会問題になっている。夕暮れに群れが旋回する下や群れがとまる電線の下などは、糞で車や歩道が汚される。ま

写真1 2015年2月、長野市内の繁華街に集まってきた数万羽のムクドリの大群



出典：筆者撮影。

た、通行人の衣服にも糞が落ちてくる。さらに、ねぐらで数千羽から1万羽が一晩にする糞は多量で、その糞の悪臭も深刻である。駅前などの繁華街は、人にとって最も清潔にしておく場所である。市によっては、歩道に落とされた糞の清掃やねぐら場所の糞の除去に年間数百万円の予算を使っている。

さらに、市街地のねぐらに集まってきたムクドリは絶えず耳ざわりの声で鳴きかわし、ねぐらについ

た後も夜中まで鳴き続ける。そのため、その鳴き声による騒音被害も深刻で、近くに住む人の中にはノイローゼになる人も出てくるほどである。

そのため、現在では、市街地にねぐらをとるムクドリを追い払う様々な道具が市販されており、鷹を飛ばして追い払う、ねぐらとなっている木の枝をカットし、街路樹を小さくしてしまう等、様々な試みがなされてきている。しかし、いずれも効果は一時的なものにすぎなく、一向に根本的な問題の解決には至っていない。いくらお金をかけても、何をしても市街地からムクドリを追い払うことができないので、多くの都市では最近ではあきらめムードが広がっている。

では、この問題を解決する方法はないのだろうか？

この問題解決のためには、まず、ムクドリとはどんな鳥なのかを知る必要がある。また、この鳥は、以前から市街地にねぐらをとっていたのではない。そのため、なぜ、最近市街地の繁華街にねぐらをとるようになったのか、その理由についても知る必要がある。

筆者は、これまでいくつかの都市でムクドリを市街地から追い払うことに成功した経験を持っている。その経験をもとに、この問題の根本的な解決策を示した上で、ムクドリなどの野生動物と人との好ましい共存の在り方について言及することにした。

2 農耕地に適応した鳥 ムクドリ

ムクドリは、体全体が灰褐色で、嘴の黄色が特徴の体重 70 ～ 100g の鳥である（写真 2）。雌雄同色で、中国、モンゴルから朝鮮半島、日本にかけて分布する東アジアの鳥である。日本では、九州以北に広く繁殖する身近な鳥で、北海道と東北地方のものは冬に南に移動する。

雑食性で、植物の種子や果物、昆虫などを好んで食べる。農作物に害を及ぼす虫を食べることから益鳥であるが、反面、サクランボ、リンゴ、カキなどの果樹の実も好んで食べるので、害鳥でもある。

4 月から 6 月の繁殖期にはつがいとなり、神社の

写真 2 ムクドリ ほぼ日本中に生息する
日本ではなじみの鳥である



出典：筆者撮影。

大木の洞や建物の隙間に巣をつくり繁殖し、餌は巣から離れた水田、畑、果樹園といった農耕地、河原など開けた環境でとる。雛が巣立つ 6 月頃から群れになり、以後夏から秋、冬を通して群れで生活する鳥である。日中は、農耕地、河原などに群れているが、夜には集まって集団でねぐらをとる鳥である。夏には、各地の林に分散し小群でねぐらをとるが、秋から冬にはしだいに大群となり、冬には数万羽の大群でねぐらをとることもある。

ところで、日本人が稲作などの食物栽培を本格的に始めたのは、弥生時代以降である。それ以前の縄文時代までの日本の自然の姿は、日本は四季を通して雨が多いので、広く森で覆われた森の国であった。その森の国の中を大小の河川が流れ、いたるところに湿地と湖を形成していたというのが、日本の自然の本来の姿であった。

それが、弥生時代に入り稲作が始まったことで、平地の森や湿地は開墾され水田となり、平地には今日の里の開けた環境が広がった。その開けた環境に進出し、人と共に今日まで栄えてきた鳥がいる。スズメ、カラスに加え、ムクドリに代表される農耕地に適応した鳥である。

3 四季によるムクドリの生活の変化

では、人里でムクドリはどんな生活をしているのだろうか？ムクドリの生活を年間通して見てみることにする。

春の繁殖期には、先にもふれたように雌雄 2 羽

がつがいとなって子育てをする。繁殖する場所は、以前は郊外の集落、河原、農耕地に接した林縁の林だったが、最近では都市にも進出し、市街地の神社や公園でも繁殖がみられるようになった。神社のように多数の樹洞が得られる場所では、多くのつがいが集まって繁殖する。

繁殖を終えた7月に入る頃から、巣立った雛を連れて林のある場所に集まりだす。筆者は現在長野市の隣の飯綱町に住んでいるが、長野市内やその郊外で繁殖を終えた多くのムクドリは、千曲川の河川敷に集まってくる。河川敷では、桑の実やニワトコの実がちょうどこの時期に実り、昆虫などの餌も豊富に得られるからだ。夏の間は日中を河川敷で過ごし、主にそこをねぐらとしている。

ムクドリが日中に群れて餌をとる場所は、季節と共に変わる。長野市周辺ではリンゴが収穫期を迎える秋になると、果樹園に群れて収穫前のリンゴに被害をもたらす。霜が降りる11月以降、昆虫などの虫が得にくい時期には、ムクドリの餌は秋に実り冬まで残っている様々な樹種の果実となる。

冬に最初に好んで食べられるのは、収穫されなかったカキの実である。それが終わるとリンゴ、最後には市街地の庭木のピラカンサの実と順番に食べてゆく。その餌の変化に合わせ、ムクドリが日中を過ごす場所や群れの大きさも変化する。

4 ムクドリの就峙行動

繁殖終了後の非繁殖期にムクドリが食べる餌の内容は、地域により異なり、それに対応し日中に群れが過ごす場所には違いがある。だが、夏の時期には虫が多く食べられ、秋以降は果実食になる点は同じで、日中群れて過ごす場所は農耕地などの開けた環境である点はいずれの地域でも同じである。

非繁殖期には、餌内容と餌をとる場所の変化に合わせ、ねぐらをとる場所も季節により変化する。先に述べたように、7月の段階で市街地にねぐらをとる場合もあるが、夏の時期のねぐら場所は変化しやすく、比較的短期間に別の場所に移動する。また、集まる数も多くて数千羽である。夏から秋には、市街地のケヤキなどの落葉性の樹木に主にねぐらがとられる。

ねぐら場所が大きく変化するのは、落葉樹が紅葉

し、葉を落とした後である。以後、冬の時期には、モミ、ヒマラヤスギなどの常緑樹がねぐらになる。それと共に、ねぐらに集まる数も増え、時には万単位の個体が1か所に集まる。また、長期間にわたり同じ場所がねぐらとなる傾向がある。したがって、ムクドリのねぐらが市街地で深刻な被害をもたらすのは、冬の時期である。

ところで、ムクドリが夕方に集まりねぐらをとる行動は、就峙（しゅうじ）行動と呼ばれている。ムクドリの就峙行動については、細野（1962）、黒田（1964）の研究があり、その後は信州大学教育学部の羽田健三先生と学生・卒業生による詳しい研究がある。

最初に広範囲の地域で実施されたねぐら調査は、長野県北部の善光寺で1963年12月末（無雪期）と年が明けた翌1964年1月（有雪期）に行われた調査である（羽田〔他〕1967）。それによると、日中に長野盆地の各地に分散していた群れは、午後3時ごろからねぐらへの移動を開始し、途中の中間集合場所を経て、多くの個体は善光寺平の北の端にある赤岩ねぐらに集まり、無雪期には4万3,000羽、有雪期には5万羽がねぐらをとっていた（図1）。このねぐらに最も遠くから集まってきた群れは、長野盆地中心部の川中島で日中を過ごした群れで、ねぐらとの直線距離で約32kmであった。また、この大群のねぐらとは別に、500羽以下の小ねぐらが善光寺平各地にみられた。赤岩ねぐらとその他の小ねぐらは、いずれも郊外の竹林にとられ、当時は長野市などの市街地にねぐらは存在しなかった。

2回目の調査は、1981年12月から翌年1月に長野盆地とその北の飯山盆地、さらに南の上田盆地を含めた広範囲で実施された（信州鳥類生態研究グループ1983a）。その結果によると、ねぐらとなった場所は、前回の調査とは大きく異なり（図2）、飯山盆地と長野盆地北部で日中を過ごした群れは、長野盆地中心部にある須坂市野辺にねぐらをとった。この結果によると最も遠くから集まってきたのは、飯山盆地の群れで、約40kmの距離を毎日往復していた。それに対し、長野盆地南部と上田盆地の群れは、長野盆地中心部の青木島ねぐらと上田盆地ねぐらに分かれていた。また、これらとは別に前回

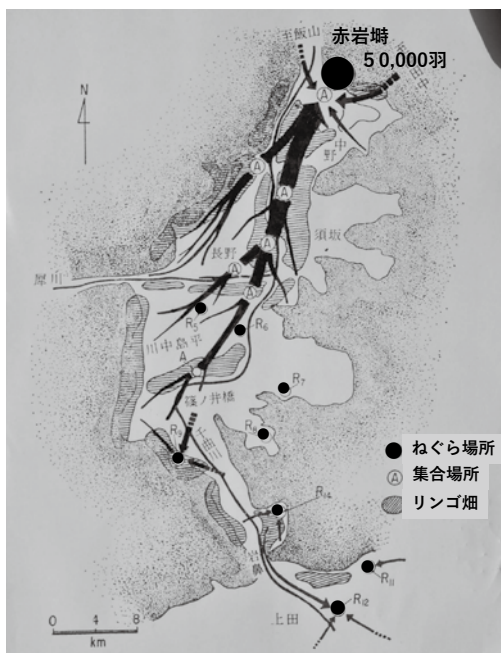


図1 1964年1月の長野盆地におけるムクドリの冬ねぐら分布と就峙経路。黒丸がねぐら場所、その大きさがねぐらに集まった個体数を示す。

出典：一部加工し、羽田〔他〕1967より転載。

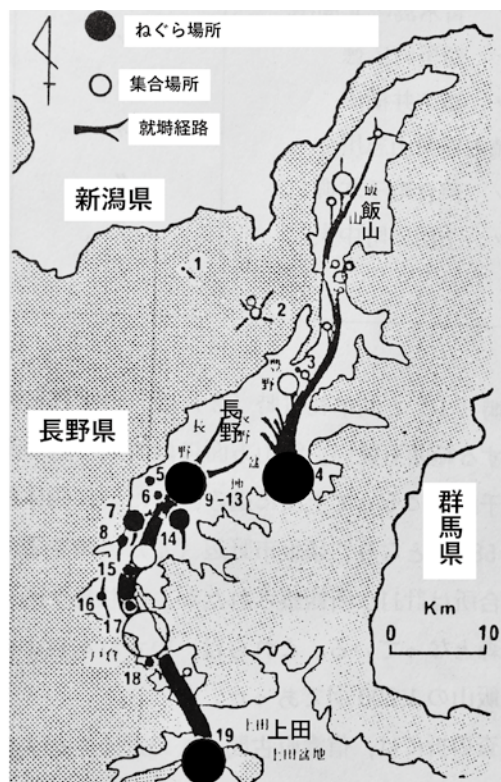


図2 1981年12月から翌年1月における飯山盆地、長野盆地、上田盆地におけるムクドリのねぐらの分布と就峙経路

出典：一部加工し、信州鳥類生態研究グループ1983aより転載。

同様500羽以下の小ねぐらも各地にあった。また、2回目の調査でも、ねぐら場所となっていたのはほとんどが郊外の竹林で、市街地にねぐらはまだなかった。

さらに、2回目と同じ1981年から1982年の冬には、長野県全域のねぐら調査も実施された（信州鳥類生態研究グループ1983a）。それによると（図

3）、長野県全体には71のねぐらがあり、合計すると当時長野県内には約10万羽（99,221羽）のムクドリが生息していたことがわかった。

なお、カラス（ハシボソガラスとハシブトガラス）もムクドリと同様の就峙行動をとることから、1963年12月から翌年1月にかけて、長野県北部

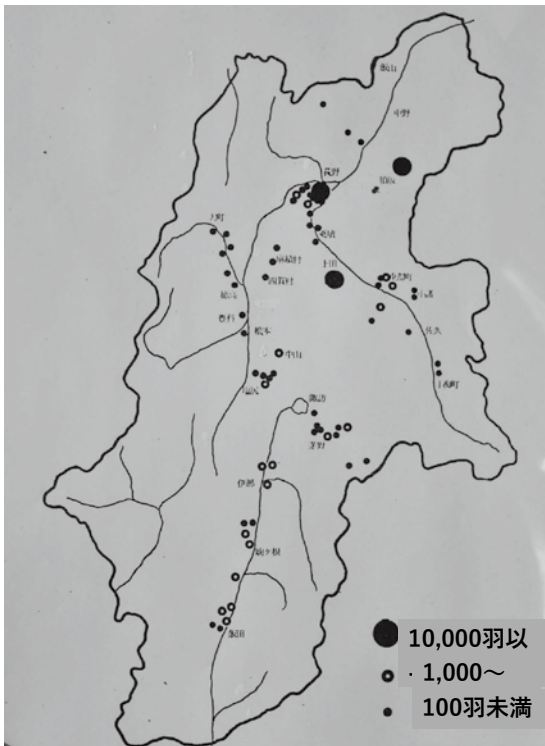


図3 1981年12月から翌1月における長野県下におけるムクドリのねぐらの分布

出典：一部加工し、信州鳥類生態研究グループ 1983a より転載。

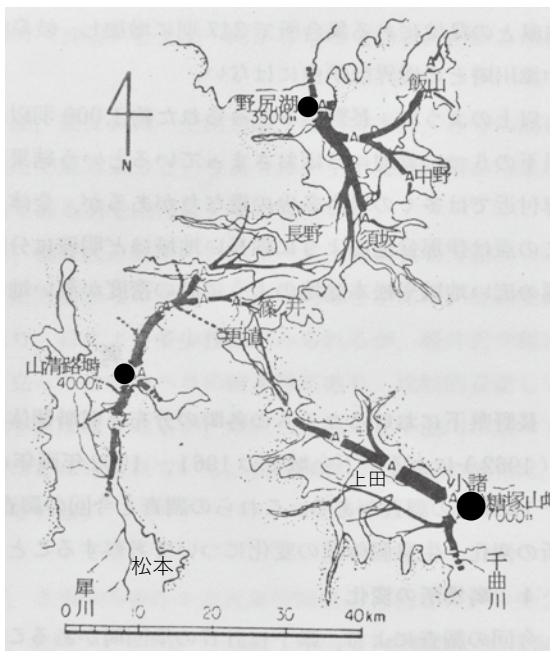


図4 1963年12月から翌年1月における長野県北部におけるカラスのねぐら分布と就峙経路

出典：一部加工し、羽田〔他〕1966 より転載。

地域で調査が実施された（羽田〔他〕1966）。その結果によると（図4）、長野盆地北部と飯山盆地のカラスは野尻湖ねぐらに3,500羽、長野盆地東部から松本盆地北部の個体は山清路ねぐらに4,000羽、長野盆地南部から上田盆地の個体は小諸市の糖塚山ねぐらに7,000羽がそれぞれねぐらをとっていた。また、同様の調査が長野県全域で1978年12月か

ら2月に実施され、当時長野県内には12のカラスのねぐらがあり、合計2万9,412羽のカラスが生息していたことがわかった（信州鳥類生態研究グループ1983b）。

この2回の調査で、カラスがねぐらを取っていた場所は、いずれも人里に隣接したアカマツ、スギ、コナラ等の山地の林で、当時はムクドリと同

様、市街地にまだねぐらをとっていなかった。

5 なぜ、ムクドリは都市にねぐらをとるようになったのか？

では、長い間郊外にねぐらをとっていたムクドリは、いつごろから市街地にねぐらをとるようになったのだろうか？また、その理由は何だったのか？

今から 70 年前の筆者が小学生だったころには、ムクドリはスズメやキジバトなどとともに空気銃などで捕獲され、食べられていた。それが、1960 年代に多くの野鳥は捕獲が禁止され、野鳥保護の考えが普及したため、それまでの人と野鳥の関係がこの時期を境に大きく変化した。長い間、野鳥は人の食料の一部だったが、この時期から野鳥は食べる対象から保護する対象になったことで、野鳥にとって人は危険な存在ではなくなった。その結果として、様々な野鳥が徐々に都市にも進出するようになった。

ムクドリが現在都市でねぐらをとっている場所には、共通した特徴がある。駅前や繁華街といった一晩中明るく、人や車が絶えない場所である。人が危険で怖い存在でなくなった結果、ムクドリは、それまでの郊外でねぐらをとるよりも、かえって人の多い場所の方が安全で快適に夜を過ごせることを数十年かけて学習したのだ。一晩中明るく、人や車の絶えない場所は、彼らの夜の天敵であるフクロウやテンといった捕食者がいないからである。また、冬には、郊外よりも都市の方が気温が高く、過ごしやすからである。

ムクドリと同様、同じ時期にスズメ、カラス、ハクセキレイなども市街地にねぐらをとるようになった。

6 成功した市街地からのムクドリ撃退作戦

筆者が勤めていた信州大学教育学部のある長野市では、2000 年ころから市街地の長野大通りのケヤキ並木にムクドリが集団でねぐらをとるようになった。それ以来、市民の苦情に応じて市役所の担当者はケヤキの木に光るものや匂いのきついもの、さらには音を出すものなどをつけて追い払おうとしたが、一向に効果がなかった。事態が深刻になったのは十数年がたってからであった。それまでは、ケヤ

キの木が落葉するとムクドリの群れはいなくなったのが、ある年からその後も大通りに隣接した鍋屋田小学校グラウンドのヒマラヤスギにねぐらを移し、冬も通して数万羽の大群が居座るようになった。その結果、グラウンドの遊具は糞で使えなくなり、大通りに面したバス停も糞まみれの状態になった。

そのため、長野市は、ヒマラヤスギの上半分と大通りに面した枝をカットしたが大群はそれでもなお同じ場所にねぐらをとり続けた。万策尽きた長野市は、鳥の研究をしているということで、私に 2015 年の 2 月に相談に訪れた。

ことの深刻さを理解した筆者は、問題のヒマラヤスギへのムクドリの就群行動を観察し、撃退作戦を立てた。筆者がとった作戦は、ムクドリが最も怖いものを使い、このねぐらは安全でないことを教える作戦であった。ムクドリにとって最も怖いのは、日中はオオタカなど猛禽のタカ類、夜はフクロウやテンといった捕食者である。研究室にあったオオタカとクマタカの古い剥製それぞれ 1 個とフクロウの剥製 3 個を、カットされたヒマラヤスギの最も高い目立つ場所に半日かけて設置した（写真 3・4）。

ねぐら場所に夕方集まってきた群れは、ねぐらの上空を大群で何回も旋回する。この行動は、ねぐら場所の安全を確かめる行動である。旋回を始めたタイミングを見計らって、校庭に設置された拡声器からオオタカやフクロウの鳴き声を一声か二声流すという作戦であった。その声を聞いて驚いたムクドリは、下を見ると天敵の声の主がいることに気づくことになる。

作戦はもう一つあった。遅くねぐらに集まってきたムクドリは、旋回をせずに直接ヒマラヤスギのねぐらに入る。そのような個体には、針金をグラウンドの地上からヒマラヤスギの最も高い場所に斜めに張り、針金に沿ってロケット花火を飛ばす作戦であった。火をつけるとロケット花火は針金に沿ってシュシュと音を立てて飛んでいき、最上部でパンと破裂する。

準備がすべて整った段階で、市役所の関係職員とねぐら場所近くの区長さん全員、さらにマスコミ関係者に小学校に集まっていただき、前日に会見を開き、作戦等を事前説明した。9 月 15 日の実施日には、長野市内の 4 つの放送局が実況中継すること

写真3 ねぐらとなっているヒマラヤスギの上に
設置されたフクロウの剥製



出典：筆者撮影。

写真4 ねぐら場所の隣の木に設置された
オオタカの剥製



出典：筆者撮影。

になった。

旋回が始まり、私の合図でタカの声が流されると、旋回する群れは大きく崩れ、その段階でねぐらをとることを断念し飛び去る個体が多くいた。その後集合してきた個体により旋回する数が増えるたびにタカとフクロウの声が流された。その結果、夕暮れ近くには旋回は見られなくなった。遅く集まってきて、旋回せずにヒマラヤスギのねぐらに直接入る個体は、ロケット花火で追い払った。こうして、初日の段階からヒマラヤスギにねぐらをとる個体はいなくなった。

この段階でムクドリの追い払いが終わったわけではない。一部の個体は、ねぐら場所近くの別の場所にねぐらをとろうとしていた。そのため、追われた

個体がどこにねぐらをとっているかの情報を得て、そこからの追い払いもした。一度追い払われた個体なので、2回目、3回目は、下で手を叩き、大声を出すだけで追い払うことができた。こうして、この日の夜9時ころには、長野市街地からすべてのムクドリを追い払うことができた。

2日目に集まるムクドリの数は、初日の十分の一に、さらに3日目にはその十分の一になり、以後長野市内にねぐらをとるムクドリはいなくなり、作戦は成功した。

翌2016年には、浜松市からムクドリ追い払いの依頼があった。浜松駅前のケヤキの木やカシの木に、秋から冬に1万羽のムクドリがねぐらをとっていた。浜松市は20年近くにわたり追い払いを試みたが、追い払うことができずにいた。2月17日から19日の3日間かけ、長野市で行ったのと同様にタカ（写真5）とフクロウの剥製、さらにその鳴き声で、浜松市内からムクドリを追い払った。さらに、同じ2016年の8月には、福島県会津若松市の駅前から1万羽のムクドリ、2020年9月には福島県の福島駅周辺から1万羽のムクドリを撃退した。1万羽を超える個体が集まったねぐらからムクドリを追い払うことは、民間の力では無理である。

2018年3月には、ほぼ同様な方法で、長野県中野市の住宅地近くにねぐらをとる数千羽のカラスを撃退することにも成功し、この方法はカラスの撃退にも使えることがわかった。

写真5 浜松駅前のカシの木に設置された
オオタカの剥製



出典：筆者撮影。

7 根本的な解決策は郊外にねぐらをとる習性に 戻す

上記のように長野市から始めて計4つの都市でムクドリを撃退することに成功したが、この方法のみでは市街地から長期間にわたりムクドリを排除することはできないことを、筆者は最初から理解していた。一旦追い払えば、しばらくの間は市街地に集まって来なくなるが、いつかはまた市街地にねぐらをとりに集まって来るからである。夏に追い払っても、秋にまた集まって来るかもしれないし、冬に追い払っても、その年の繁殖を終えた後に再び集まって来る可能性が高い。そうなったら、また追い払いをする必要があり、イタチゴっこになるからである。

さらにもう一つ大きな問題があった。筆者の確立した追い払い方法はだれにでもできるものではないことである。筆者は長年にわたり様々な鳥の研究をしてきたので、ムクドリの習性を知り尽くしているだけでなく、60歳過ぎてからは鳥の気持ちがわかると自分で言えるほどに様々な経験を持っていた。そのため、就時行動を事前に観察することで、ねぐら場所に応じてタカやフクロウの剥製と拡声器をそれぞれの位置に設置するのが最も効果的か、群れの旋回中どのタイミングで鳴き声を聞かせるのが効果的かの判断ができた。さらに、筆者は木登りが得意なので、手伝いの人が1人か2人いたら、自分で剥製や拡声器をねぐら場所に半日で設置できた。そんなことができる人は、他にはあまりいない。

市街地にねぐらをとるようになったムクドリの問題の解決策として、筆者が出した根本的な解決策は、以前のように郊外にねぐらをとる習性に時間をかけて戻すことであった。そのためには、多くの人の協力が必要である。市役所の担当者だけではどうにもならない課題である。

ムクドリを以前のように郊外にねぐらをとる習性に戻すにあたって、肝心なのは市街地のねぐらにムクドリが再び集まりかけたまだ少数の段階に徹底的に追い払うことである。数百羽の段階であったら、ねぐらの下で手を叩くとか爆竹を鳴らす程度で、その場から追い払うことが可能である。その結果、近くの別の場所に移ったら、その場でも追い払いを繰り返すことで、ムクドリに市街地にねぐらをとらせ

ないようにし、市街地にねぐらをとることを諦めさせるのである。

そのためには、市役所の担当者と共に市街地の市民が一体となって、どこにムクドリの群れが集まりはじめたか、追い払った群れが次にどこに移動したか等の情報を密にし、初期段階に徹底的に追い払う体制の確立が必要である。筆者が計4回の追い払い実施前に行った事前説明会に、4回共に市街地の区長さんにも参加いただいたのは、郊外にねぐらに移させるには市民の方の協力が欠かせないことを理解してもらい、協力してもらうためであった。

しかし、その体制を構築することは、簡単ではない。問題の一つは、市の担当者は数年で交代するため、筆者が指導した郊外にねぐらをとる習性に戻すための上記の対策方法は、次の担当者に必ずしもしっかり引き継がれていないことであった。

長野市で追い払いをして2年後、今度は同じ長野市街地にある公立小学校のヒマラヤスギに数万羽のムクドリのねぐらができてしまい、筆者が再度前回と同じ方法で撃退することになった。その2回目の追い払い以後は、市民と連携したムクドリの徹底した追い払いで、市街地から郊外にねぐら移すことに成功したのである。今では、夏の一時期を除き、長野市では現在まで10年間にわたりねぐらの問題を解決することができている。

ムクドリと人とが市街地で共存することは、しょせん無理な話である。両者が共存するためには、以前のようにムクドリは郊外に、人は都市にと互いに棲み分ける以外にない。それができたら、人の方が一方的に被害をこうむることはなくなり、追い払いや清掃のために毎年多額の費用を使う必要がなくなる。

ムクドリと人とが再び良好な関係を取り戻すには、上記のように市街地にねぐらをとりに集まった初期段階で市民が協力して徹底的に追い払うことを1・2年続けることで、市街地にねぐらをとることを諦めさせる以外に解決策はないのである。何をしても追い払えないことから諦めるのではなく、今回示した解決策をもとに、多くの都市で取り組んでもらいたい。その結果、市街地の駅前や繁華街での理想的な都市計画の実施が可能となり、緑豊かで清潔

な都市環境を取り戻すことになることを切に願っている。

8 市街地で人の生活を脅かす他の野鳥への対策

以上、都市の市街地にねぐらをとるムクドリ被害とその解決策について述べたが、都市における鳥の被害は、これだけではない。

都市の建物にねぐらをとる繁殖するドバトの糞による建物への被害は、以前から大きな問題になってきた。今から 50 年ほど前、長野市の善光寺の建物に多数のドバトが住み着き、その糞害から貴重な建物を守ることが課題となった。この課題は、ドバトがねぐらをとる繁殖している場所に金網を張り、ドバトがとまれないようにすることで、今では解決されている。また、長野駅の以前の建物にもドバトが住み着き、その糞害が問題になったが、新しい駅に建て替える際、ドバトがとまれない構造にすることで、今は解決されている。数年前には、長野市の運動施設の天井に住み着いたドバトの糞で、観覧席の椅子が糞で汚されるので、どうしたらよいかと相談をうけたことがある。その対策として天井全体をネットで覆い、ドバトがとまれないようにする提案をした。ドバトの対策は、建物自体をドバトがとまれない構造にすることで、ほぼ解決可能である。

また、市街地の送電線鉄塔にカラスが営巣し、時々停電を起こすので、良い対策はないかと電力会社から相談されたことがある。鉄塔に巣を造るようになったのは、カラスの新しい文化なので、巣を造ったらすぐに取り除くことを続けること、鉄塔自体を可能な限りカラスが巣を造りにくい構造にすることを提案した。それらの対策をとった結果、カラスによる停電を減少させることができた。

さらに、都市部におけるカラスによるごみ置き場の攪乱がある。この問題は、カラスからごみを隔離する等様々な工夫をすることで、最近では被害が軽減されている。

先に述べたように、近年人は野鳥にとって以前のように危険な存在で無くなったことで、多くの野鳥が都市部に進出し、人の生活と接触する機会が多くなった。そのため野鳥が人とトラブルを起こす機会は多くなったが、その多くは人の努力と工夫で解決できると考えている。

9 増えすぎた野生動物の数を減らし人との緊張関係の再構築が必要

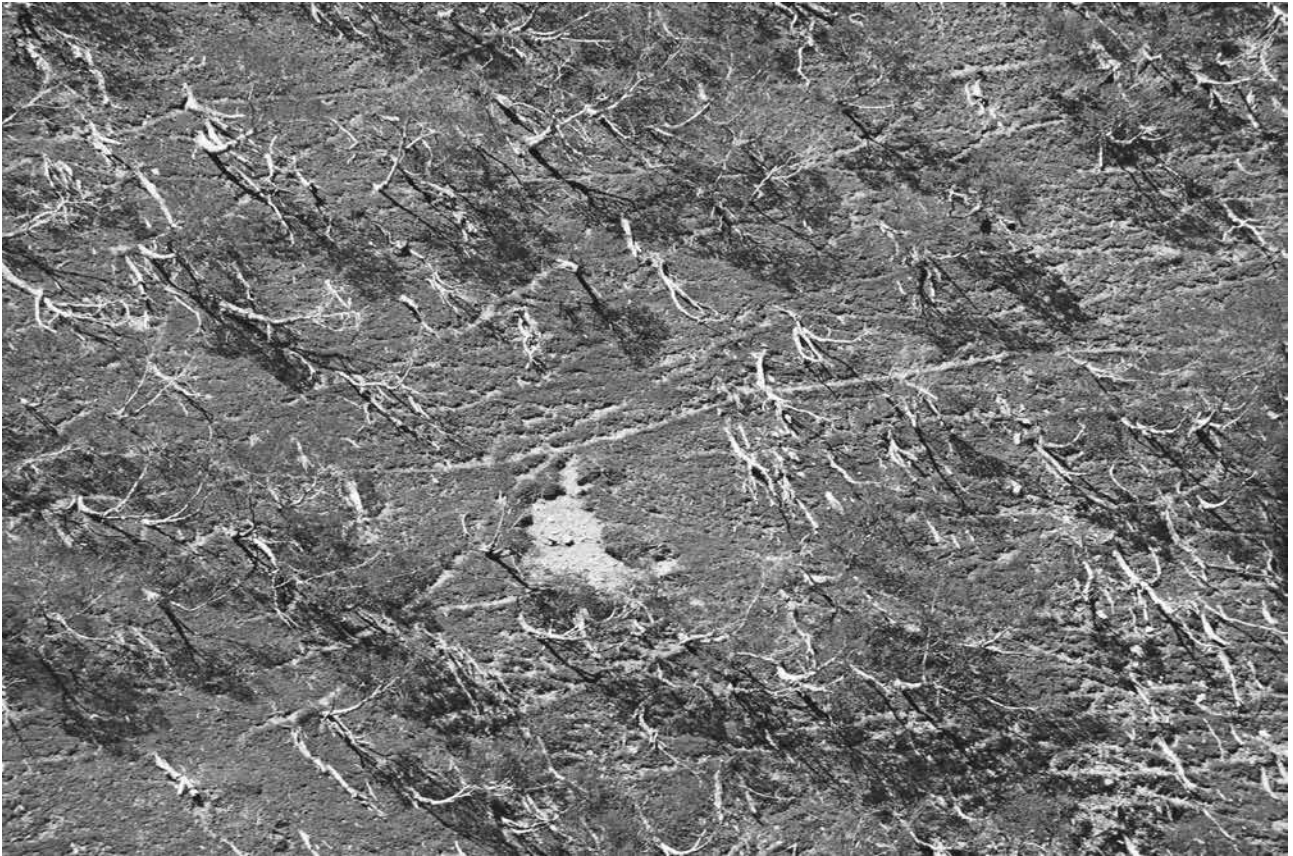
人の生活圏に進出し人の生活を脅かしているのは、野鳥だけではない。たびたび報道されているように、最近ではクマが都市にまで出現するようになり、人身被害も増えている。だが、人の生活圏に侵入するようになったのは、イノシシ、ニホンザル、ニホンジカ、カモシカも同様である。なぜ、これらの野生動物は、最近人の生活圏に侵入するようになったのだろうか？また、この問題に、我々は今後どのように対処したらよいのだろうか？

これらの野生動物の侵入は、必ずしも人の生活圏にだけではない。筆者は長年にわたり、ライチョウの調査と保護活動に携わっているが、最近、これらの野生動物はライチョウの棲む高山帯にも侵入するようになった(中村 2006・2013)。筆者が 30 歳の頃にライチョウ調査で山に登っても、高山帯でニホンジカ、ニホンザル、イノシシ、クマに出会うことはなかったが、最近ではこれらの野生動物を高山帯で見かけることが普通になり、高山のお花畑の食害といった深刻な問題を引き起こしている(写真 6)。クマも含めて、これらの野生動物は上と下に分布を拡大し、高山と人の生活圏双方で問題を起こしているのである。

このような事態を引き起こすようになった原因は、最近これらの野生動物の数が増えすぎたことにある。かつて日本では、オオカミがこれらの野生動物が増え過ぎるのを抑える役割を果たしていたと言われている。そのオオカミが絶滅した後は、人が代わって鉄砲で駆除することで数が増え過ぎるのを抑えていた。その役割を果たしていたのが猟友会であった。しかし、近年、猟友会の会員数の減少と高齢化で野生動物の数を抑える役割が果たせなくなった。そのことが、これらの野生動物の数の増加を引き起こすことになったのである。したがって、クマをはじめとしたこれらの野生動物の数を日本の自然環境に合った数まで減らし、自然とのバランスを取り戻すことが、今日起きている野生動物問題の根本的な解決策である。

もう一つの課題は、先に人とムクドリとの好ましい関係について述べたように、人とクマなど野生動物との間で一定の緊張関係を取り戻すことである。

写真 6 ニホンジカの食害で失われた南アルプス塩見岳のお花畑 多数の鹿道がつけられ、一部では土砂の流出が始まっている



出典：筆者撮影。

野生動物が人を恐れるという関係を取り戻すことにより、里、里山、都市は人の領域、山地の森はクマなどの野生動物の領域といったかつての棲み分け関係を取り戻すことが、農業被害、ひいては人身被害を減らすことになる。

野生動物は、ペットとは異なる。天敵などがいないと、野生動物はその動物が本来持っている能力いっぱい数を増やす。行き過ぎた動物愛護は、自然のバランスを崩し、様々な問題を引き起こすことになるのである。

参考文献

- 黒田長久（1964）「ムクドリの罫アンケートその他について」『鳥』第 82 号、pp.79-105.
- 信州鳥類生態研究グループ（1983a）「長野県下におけるムクドリの冬罫の分布と就罫個体数」『長野県下における特殊鳥類調査報告書』pp.117-133.
- 信州鳥類生態研究グループ（1983b）「長野県下におけるカラスの集団罫の分布と就罫個体数」『長野県下における特殊鳥類調査報告書』pp.97-107.
- 中村浩志（2006）『雷鳥が語りかけるもの』山と溪谷社
- 中村浩志（2013）『二万年の奇跡を生きた鳥 ライチョウ』農文協
- 羽田健三・飯田洋一・香川敏明・母 袋卓也・山岸哲（1966）「カラスの長野県北信部の就罫地域群について 第 1 報」『日本生態学会誌』第 16 号、pp.213-216.
- 羽田健三・牛山英彦・寺西けさい・佐野昌男（1967）「長野県下の善光寺平におけるムクドリの冬期の就罫地域群（第一報）」『日本生態学会誌』第 17 号、pp.234-237.
- 細野哲夫（1962）「軽井沢東部地区におけるムクドリの罫および就罫行動」『鳥』第 79 号/第 80 号、pp.145-162.